

# 御挨拶

旭陵同窓会 会長

木下 毅

(第三十七期)



平成二十四年度旭陵同窓会が盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。皆様のご支援で同窓会長も二期目になりました、今後ともよろしくお願いいたします。最近の総会は幹事の方々のお骨折りで参加者も少しずつ増えて三百人は集まるようになりました。まだまだ多くの方に集まっていただけ交流を深めていただければと思っています。旭陵同窓会には東京、関西、広島、山口、豊浦、福岡に支部がありそれぞれに活躍されています。今年の東京支部総会は七月二十一日に行われますが、五百人を目標に開催することです。本部の下関も負けてはいられないので、皆様のご参加をよろしく願っています。

国の経済も、政治も混沌としていて明るさが見えてきません。特に超高齢社会という呪縛に縛られ悲観的な見通しが多くなっています。そこで高齢者の定義を六十五歳から七十歳に変えてはどうでしょうか。六十五歳が高齢者になったのは日本では一九六五年の国勢調査からとなっています。一九六五年の日本人の平均寿命は男六十八歳、女七十三歳です。二〇〇九年には男八十歳、女八十六歳となって

おり、一九六五年から二〇〇九年の四十四年間に男十二歳、女は十三歳程寿命が伸びています。高齢者を七十歳と定義して計算すると二〇一一年の高齢化率は二十三・四％から十七・三％に減り、また高齢者一人を支えるのに必要な生産年齢人口（生産年齢人口）は二・七人から四・一人となります。二〇二五年では高齢化率は三十・五％から二十四・六％に、高齢者一人を支えるのに必要な生産年齢人口は二・〇人から二・七人となり高齢者の定義をかえることによって二〇二五年になっても高齢化率、高齢者一人を支えるのに必要な生産年齢人口は二〇一一年と同じ事になります。その結果、日本が超高齢社会であるという呪縛から解放され、将来への不安が大きく減り、不安がなくなれば消費も増える景気の改善が望めるでしょう。

そのためには七十歳まで働ける社会の創造が必要です。働いてもあまり年金が減らないような年金の支払い体制の検討や勤務体系の検討が必要になります。

東日本大震災で国の指導力がないと議論されていましたが、物事を進めるにはある程度のスピードが必要です。明治維新をやり遂げた人々の血を受け継いでいる山口県人への期待が大きいです。ここで旭陵同窓会の皆様が一肌脱いでいかげでしょうか。